

令和6年度 学校評価報告書（目標設定・実施結果）

	視点	4年間の目標 (令和6年度策定)	1年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 (3月5日実施)	総合評価（3月21日実施）	
				具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
1	教育課程 学習指導	<b>Confidence 自信</b> <b>Communication 対話</b> ①学び直しによる確かな学力の育成と定着を図る。 ②コミュニケーション力を育成するため教科横断的な探究型学習を追求する。	①一人一台端末を活用して学習習慣を身に付けさせるとともに、生徒の個別の学習状況を把握し、個別最適な支援につなげる。	①-1 朝学習と連動した課題配信により、学習習慣を定着させる。 ①-2 チェックテストとフォローアップ配信により、授業で取り組んだ範囲の学力を定着させる。	①-1 課題の提出率の目標値75%とし、目標値を超えることができたか。 ①-2 生徒による授業評価において、「授業の中で身に付いたことや、できるようになったことを実感することができた」の肯定的な評価が85%を超えることができたか。	①- 1 課題の提出率は75%で、目標値を達成した。 ①- 2 「授業の中で身に付いたことや、できるようになったことを実感することができた」肯定的な評価は85%で目標を達成することができた。	①- 1 学期が進むと提出率も減少傾向にあった。補習を実施するなど、粘り強く指導する。 ①- 2 さらになる向上を目指し、粘り強く丁寧な学習指導をより一層充実させていく。	・目標を達成できたことは評価できる。次年度に上手くつなげるとよい。	①- 1 目標は達成できたが、学期が進むと提出率も減少傾向にあった。改善できれば、更に提出率の向上が見込まれる。 ①- 2 目標達成はできたが、教科ごとではばらつきがあった。	①- 1 端末の利用や補習学習の充実により、多様な学習環境を展開していく。  ①- 2 苦手科目の克服のため、小中の学び直しの機会を充実させる。
2	(幼児・児童・)生徒指導・支援	<b>Confidence 自信</b> <b>Compliance 遵守</b> ①社会人として通用するための規範意識を育成する。 ②自己目標を達成することにより自分を肯定する力を身に付ける。 ③中学校との連携や交流から部活動や学校行事における生徒の主体的な活動の支援を図る。	①生活指導と学習指導の一体化により、基本的な生活習慣を確立させる。 ③小中学校との交流や中高大連携講座、ボランティア、インターンシップなど生徒の主体的な活動を活性化する。	①朝学習への取組みにより、生活習慣の一部として登校時間を定着させる。 ③小中学校へ訪問してのボランティアや明日楓会等を通じたボランティア、中高大連携講座やインターンシップへの参加を促す。	①年間遅刻数が60回以上の者の割合を前年度の19%より減少させることができたか。 ③連携生の入学者数は減少(45⇒37)したものの、ボランティアの参加者(43)、中高大連携講座(22)やインターンシップ(21)への参加者数において、前年度並みの数を確保することができたか。	①年間60回以上遅刻してしまった生徒の数の割合は全校生徒の16.4%（暫定）となり、僅かに減少した。 基本的な生活習慣が少しずつ改善した。 ③地域防災部門(29)、福祉部門は延べ(33)、グローバル部門は(8)の参加者、中高大連携講座は環境部門(35)、ボランティア(10)、インターンシップ(29)の参加者数となり、前年度並みの数を確保できた。なお、連携生の広報活動補助は、1学年の連携生全員の参加であった。	①年間60回以上遅刻してしまった生徒はまだ多い。今後も指導を継続していく。  ③中高連携事業のもののづくり部門の継続が難しいため、今後は、校内で取り組むことができ、かつ中学校のニーズに合った企画を考える必要がある。また、ボランティアや連携事業への連携生以外の生徒の参加を促す取り組みも進めたい。	・多岐にわたって教育活動をされている。連携事業も大切である。 ・連携生の数は減少したが、ボランティアや中高大連携講座、インターンシップへの参加の数字を見ると、よく頑張っているのではないかと。連携生以外の生徒の参加を増やす取組は、次年度の課題としてもraitたい。 ・部活動があっても活動する人数、部員の少ないことが課題である。	①年間遅刻数が60回以上の者の割合を前年度の19%より減少させる目標は達成した。朝学習への取組を充実させるためには遅刻者を更に減少させる必要がある。  ③連携生の入学者数が減少したもののボランティアやインターンシップへの参加者数は前年度並みを維持することができた。課題は明日楓会を通じたインターンシップへの参加者がなかったことである。	①基本的な生活習慣の改善のために取組を継続していくとともに、朝学習の目標を立てさせることで主体的な学びの態度を育成していく。  ③連携生が中心となっているボランティアは、連携生以外の生徒の参加を促し、社会に貢献する力を育成する。併せてインターンシップにより社会人基礎力の育成を充実させる。
3	進路指導・支援	<b>Confidence 自信</b> <b>Communication 対話</b> ①社会人基礎力をつけ、コミュニケーション力をベースとした人間力を培う。 ②就職、進学や外国につながるのがある生徒の多様な進路に対応できるカリキュラムの追求を継続する。	②キャリア教育実践プログラム及び地域と協働した活動により、多様な進路に対応した指導・支援に取り組む。	②-1 総合的な探究の時間において、生徒の望ましい勤労観と職業観を育成する。 ②-2 ボランティア精神と公共性のある住民活動の実務体験を通して将来設計の立案と社会的移行の準備を進める。	②-1 生徒による授業評価において、「授業で得た知識をもとに、自分の考えをまとめたり、課題の解決方法を考えたりすることができた」の肯定的な評価が前年度の85%を超えることができたか。 ②-2 進路決定率が前年度の87%を超えることができたか。	②-1 「授業で得た知識をもとに、自分の考えをまとめたり、課題の解決方法を考えたりすることができた」の肯定的な評価は83.6%であったが、企業からの協力を基に多くのガイダンスを実施して職業観を育成することができた。 ②-2 2月中旬での進路決定率は92.1%である。まだ活動中の生徒がいるので最後までしっかりと向き合わせた。また、英語外部試験利用により、上智大学合格という非常に良い成績を上げた。	②-1 3学年で「マナー講座」を実施した。社会人としての意識を持たせる良い機会となったので、今後も継続したい。  ②-2 特に就職希望者に対して、しっかり聴き取り、希望の実現につなげる。	・肯定的な評価の目標85%を惜しくも超えることはできなかったが、83.6%は良い数字だと思う。 ・マナー講座はとても良い取組だと思う。 ・進路決定率が87%を超え、目標を達成できたことは素晴らしい。生徒の頑張りもあるが先生方のご指導の賜物だと思う。	②-1 目標数値に若干届かなかった。自分の考えをまとめるところまでで、さらに考察したり発表するためにまとめたりする機会が足りなかった。  ②-2 進路決定率は3月12日時点で94.5%であった。難関大学への進学は後輩の励みになる。一方、進路活動への取組が遅く年度末まで活動している者がいる。	②-1 次年度も企業からの協力を基に多くのガイダンスを実施して職業観を育成していく。  ②-2 就職希望者に対してガイダンスとカウンセリングを充実させることで、希望の実現につなげる。

	視点	4年間の目標 (令和6年度策定)	1年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 (3月5日実施)	総合評価（3月21日実施）	
				具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
4	地域等との協働  ㊤ CEMLA と は 、 Center for Multicultural Learning & Activitiesの略で多 文化学習活動センタ ーという意味。	<b>Compliance 遵守</b> <b>Communication 対話</b> ①学校運営協議会と意見交換をしながら地域に貢献できる人材の育成を図る。また地域学校協働本部（明日楓会）と連携し、実践的な就業体験の実施など生徒のニーズに対応する。 ②連携型中高一貫校として、愛川町教育力を高め、地域発展につなげる。多様性を認め、他者を敬う姿勢を構築する。	②「外国につながるのある児童・生徒」との関わりを通して、多文化共生社会の担い手となる生徒を育成するとともに、授業のユニバーサルデザイン化や生徒への個別支援の充実に取り組む。	②-1 CEMLA㊤研究会を通じて、高校・大学・NP0に愛川町の小学校を加えて「外国につながるのある児童・生徒」の教育などについて研究を進める。 ②-2 地域の大学と連携して「日本語を母語としない生徒」に対して、授業において多言語による個別支援が可能なシステムの研究を進める。	②-1 「外国につながるのある児童」が一定数在籍する小学校の授業見学を入口にして、課題をみつけ、その課題を解決するための方法などを提言する準備ができたか。 ②-2 一人一台端末を活用して、授業の同時通訳など多言語による個別支援が可能なシステムの構築について実現できたか。	②-1 外国につながるのある児童」が一定数在籍する小学校の授業見学を実施し、i-ROOMプロジェクトを立ち上げた。近隣中学校や大学へは、連携事業を通して、さまざまな活動をおこなった。  ②-2 多言語翻訳授業を試行した結果、実用化へ向けた見通しが立てられたが、翻訳の正確さ・表示の時差などいくつかの課題も見つかった。	②-1 在県外国人募集枠以外で入学してくる「外国につながるのある生徒」が今後増えることが予想される。今後は、ふりがな付きプリントの作成やシンプルな言葉を使用するなど、在県生徒対象のみでなく、全生徒対象としてユニバーサルデザイン化を進めたい。 ②-2 今後の本格導入に向けて、正確に翻訳しやすい言葉・言い回しの使用や翻訳にかかる時間を考慮した授業設定など使用する教員側の授業研究・検証も必要である。	・大学にも外国につながる学生がいて、日本語での授業、特に専門的な用語等について指導に苦勞している。愛川高校のほか、愛川町とも連携しているのでi-ROOMの事業についても引き続き取り組んでいきたい。 ・ i-ROOMプロジェクトは、愛川町全体の教育力向上につながる取組だと思う。今後が楽しみである。多言語翻訳授業の実用化に向けた見通しが立てられたとあり、まだ改善の余地もあるとのことなので、今後も研究を進めていただきたい。	②-1 外国につながるのある生徒への支援は授業のユニバーサルデザイン化につながるという気付きを得られた。ルビが振ってあれば支援が十分なわけではない。学習ツールをいかに使いこなすかが課題である。 ②-2 i-ROOMプロジェクトにより、AI多言語翻訳システムを使った実験授業を実施した。英語やスペイン語等のメジャーな言語は翻訳の精度が高いものの、マイナーな言語や専門用語の翻訳の精度は高くないことがわかった。	②-1 日本語の習得が最重要であり、年度開始期に遅れを生じさせないよう学習環境を整える。  ②-2 授業を録画して、そのデータを利用して複数回見られる環境をつくる。また、すべての教員が外国につながるのある生徒と関わり合える環境をつくる。
5	学校管理 学校運営	<b>Compliance 遵守</b> <b>Communication 対話</b> ①心理的安全性の確保と風通しの良い職場づくりにより事故不祥事を防止し、働き方改革を推進する。 ②防災意識を高め、地域全体で子どもを守る体制作りに取り組み、安全で安心な学校環境を維持する。	①-1 月80時間超の時間外在校等時間の教員数をゼロにし、月45時間超の時間外在校等時間の教員数を昨年より減らす。  ①-2 不祥事防止等に関する職員からの提案や意見を取り入れ、不祥事防止会議を通して、必要な取組を実施する。	①-1 管理職による声かけや面談により長時間勤務を削減するとともに、ICTの活用による校務の効率化を進める。  ①-2 不祥事防止会議を各グループが主宰する形式で実施し、同僚性を高める組織づくりに取り組み、事故不祥事を防止する。	①-1 月80時間超の時間外在校等時間の教員数を前年度の4名からゼロに、月45時間超の時間外在校等時間の教員数を前年度の延べ55名より減らせたか。  ①-2 不祥事ゼロプログラムにより、継続的に職場研修を実施し、事故不祥事ゼロを達成したか。	①-1 時間外在校等時間が月80時間超の教員の延べ人数はゼロだったが、時間外在校等時間が月45時間超の教員数は昨年よりも増えてしまった。  ①-2 定例会議の前に不事防止会議を取り入れ、職員間で共有することで事故不祥事防止の意識付けができた。	①-1 時間外在校等時間が月45時間超の教員の延べ人数を昨年より減らすことができなかったので、ICT活用のほか、業務の見直しも視野に入れ効率化を図る。 ①-2 引き続き職員間で共有し、当事者意識を持ち、職務に専念する。	・時間外の対応については対策が必要。AIやメールなども取り入れてはどうか。業務を精選していくことが必要である。 ・一部目標を達成できなかったとあるが、教員の働き方改革の流れの中で、一定の成果が上がっていると評価できる。 ・不祥事防止の取組はこれで終わりというゴールはないので、継続していただきたい。	①-1 時間外在校等時間が月80時間超の教員数をゼロとする目標は達成した。時間外在校等時間が月45時間超の教員数をいかに減らすかが課題である。 ①-2 各職員が自分の業務分担や役割を超えて、チームで協力して業務を行う体制が確立されている。「追い出し」や「手短に」といった不適切な言葉遣いが散見される。	①-1 常態的な長時間勤務は心身をむしばむ恐れがあるため、仕事に区切りをつける意識を醸成する。  ①-2 Teamsを活用して不祥事防止の取組の主体である職員一人ひとりへの直接的な働きかけを地道に継続する。